津田昇平教話　第四話

令和三年一月四日　朝の教話

一心に信仰する者ならば、いとこの端まで
もおかげをいただくぞな。

おはようございます。令和三年一月四日をお迎えさせて頂きました。教祖様のご理解に、「一心に信仰する者ならば、いとこの端までもおかげをいただくぞな」という、そういうご理解があるんですよね。近藤藤守（こんどうふじもり）先生にお下げになられたんですけど、教典では「のう近藤さん」って、ひと言入るんですよ。

のう近藤さん、一心に信仰する者ならば、いとこの端
までもおかげをいただくぞな。

（理Ⅰ　近藤藤守　三六）

そういうことを仰ったんですよね。

信心のはじめというのんは、皆それぞれ、自分自身が難儀（なんぎ）になったりっていうところであったり、親や子供や夫やら、まあこう人間ですよね、あるいは仕事のことやら、何かしら困ったことがあって、信心することになる。信心を求めることが多いかなぁと思います。

御神縁（ごしんえん）を頂くというのは、生まれながらにして金光教の信心のある家庭に生まれた人であれば、あまり意識することなく、手を合わせることは何となく身についてるものの、でも本気でやっぱり信仰するようになろうと思ったら、どこかでやっぱりぶつかること、何かにぶつかって神様におすがりするということになる。またそこからこう、本当の意味で

ね、御神縁は頂いてても、御神縁を結ぶということ、神様と縁を結ぶというのは、やっぱり何かしら、その人なりの大きな出来事、事件があって、それをきっかけにして、神様を求めて、しっかりと結んでいくということになると思うんです。

で、自分自身がおかげを頂くということはもちろんなんですけども、教祖様は「信心さしてもらったら、いとこの端までもおかげを頂くことになる」って、こう仰っとるんです。

血の繋がりで言うたら、親とか兄弟とかっていうのは、まあもちろんのことでしょうね。親、兄弟、家族、さらにはいとこ、いとこの端まで言うくらいだから、どこまでのことか分かりませんけれども、繋がりの

ある、ご縁のある、そういう方々皆おかげになってくるっていうことを仰ってるんでしょう。

じゃあこれ、どうやったらいとこの端までもおかげ頂けんのんか。考えてみたら、信心というのはめいめいですから、たとえ兄弟であっても家族であっても親子であってもですよ、自分が信心しておかげを頂くというのんと、本人が信心しておかげを頂くということは、やっぱり違うんですよね。

ま、子供がちっちゃいとか、幼いとかっていうんであれば、親がしっかり信心しておかげを頂く。子供のことはね。これはまあ、分かりますよ。でも大きくなってきたら、自分で信心して、自分でおかげを頂くと

いうことを身につけないとおかげにならないというのも、これもやっぱり本当です。

じゃあ「一心に信仰する者ならば、いとこの端までもおかげを頂く」っていうのは、これどういうことか。

私が信心したら、いとこの端まで皆おかげ頂くんか。そういうことを仰ってるんか。それとも、一心に信仰するということになれば、私という人間を中心にして、信心の輪が広がっていって、その人たちも、自ず(おの)から信心をするようになって、おかげを頂くということを仰っとるんか。

うーん、どうなんでしょうね。まあどちらもあるんかな、という気はします。

教祖様は違うみ教えの中でもね、

百姓の人は、一粒（つぶ）の種から積もれば何石（ごく）というようになるのも知っておられるが、一人がおかげを受けたので千人万人もおかげを受けるようになるから、よい手本になるような信心するがよろしいなあ。

（理Ｉ　山本定次郎（やまもとさだじろう）　六六より抜粋）

そういうご理解があるんですよね。

一人が良い信心をすると、千人も万人もおかげが頂ける。これ、例えて言うたら、教祖様が一人、最初信心し始めたわけでしょ。で、教祖様一人が信心さしてもらった。そこからスタートして、御道（おみち）ができたというふうにして考えたとしましょう。金光教がね。

教祖様が一人、良い信心をなさった。じゃあ、みんなそれで千人も万人もおかげを頂いた。ま、そうなんですけど。千人も万人も億人もそら、おかげ頂いたと思います。

でもそれ、教祖様が良い信心をされて、千人も万人も億人も、百何十年続く中で皆おかげ頂いてるのはこれ、信心、それぞれがさしてもらうからこそ、おかげになってるっていうことはやっぱ多いですよね。

逆にね、教祖様んとこのお広前(ひろまえ)にお参りをして、助けを求めて来られたとした。昨日までもよく話しましたけども、ただ、こう祈念祈祷(きねんきとう)とかね、拝んでくれとか、そういうことでおかげを頂くということではないってことを繰り返し仰ってますし、実際、教祖様のお取次(とりつぎ)を頂いても、助からん人はたくさんおったわけですよね。これ、助からんというのんは、自分自身がおかげを頂けるような、助かるような信心に力を入れんかったっていうことで間違いないと思います。

そう思ったら、教祖様みたいに千人も万人も億人もとはまあ言いませんけども、自分がしっかりと良い信心をしたら、信心する人が、一人でも二人でも、いとこの端までもっていうふうにして仰ってますけど、別

に血縁に限る必要はないでしょうね。自分に繋がりのある方、それが一人でも二人でも、友人でも知人でも、信心が伝わっていく。そうして信心するようになった人から、順におかげを頂いていく。

ま、悪い信心良い信心って言うたら、対比で言うたら悪い信心になりますけど、悪い信心してたら、皆それを真似(まね)して信心しようという気には、まあならんと思います。でも、良い信心しておかげを頂いてる、そういう人を見てると、やっぱりこう、信心さしてもらおうかな、自分も信心しておかげ頂きたいなぁいう気持ちになるでしょうね。

そう思ったら「一心に信仰する者ならば、いとこの端までもおかげを頂く」ということは、一心に信仰する者ならば、その人の周りにも信心

が伝わっていく、あるいは伝えていく。また、それが伝わっていく。ま、だからこそ、周りの人たちもおかげを頂いていくことになる、ということを仰ってるんやろうな。きっとそういうことなんでしょうね。その方が理にかなってると思います。

一人が良い信心をしたら、千人も万人もおかげを頂く。うーん、やっぱりそうですよね。教祖様は、信心自分でしはって、それだけでみんながみんな助かるというわけじゃなくって、教祖様が良い信心をなさっておかげを頂かれた。その信心を教えてもらって、それを学んで、真似て、お稽古（けいこ）して、そして信心が段々できるようになってきた。そして、おかげは皆頂けるようになった。これはよう分かりますし、その通りやと思

いますよね。

一粒万倍（いちりゅうまんばい）という言葉がありますよね。一粒万倍。これ、どういう意味かと言うたら、お米のことを言います。一粒（つぶ）をこう、籾（もみ）ですよね。粒と言えば粒、一粒って一籾ですよね。それを蒔（ま）いたら、それを育てたら、一粒の籾が、何万倍にも実る、稲穂になるということ。まあそういうふうな意味はあると思います。

先ほどのね、一人がおかげ頂いたら千人も万人もおかげ頂けるっていうとこに「百姓の人は」ってありますでしょ。「一粒（つぶ）の種から積もれば何石（ごく）」何石ってあんま言いませんよね。で、何石って言葉を、少し調べた

ことがあるんです、以前ね。

一石（いっこく）っていうのんは、十斗（と）。で、それは百升（しょう）、つまり千合（ごう）になるっていうんですよね。一合二合はお米でね、ご飯炊く時に数えますよ。十合で一升ですよね。十升で一斗になる。十斗で一石になります。

でね、こっからまた調べたんですよ。一合っていうのは、結局何粒あるんやろうって。ま、普段カップで計りますでしょ、皆さんね。ほんで、何合炊こうかって考える。一合っていうのは約六千五百粒っていうのが、大体今で言うたらなるということですね。お米屋さんのホームページをちょっと調べまして、そしたら六千五百粒ってあったと思います。

で、一升。一升はつまり十合ですよ。十合っていうのは、六万五千粒

になります。一斗っていうのは、十升、つまり百合。こうなると六十五万粒になる。じゃ、一石ってどんだけ言うたら、米が十斗、つまり千合ですね。こうなってくるとね、えー、一、十、百、千、万、十万、百万、六百五十万。六百五十万粒になるっていうことなんです。

私、そんなね、お米を作ったってことはないですよ。でも、いっぺんどんなんか知りたいと思って、あの、発泡スチロールみたいのでね、あ、そや、お供えがあったんですよ。発泡スチロールでお米を育てるっていう、そういうセットのお供えが以前ありましてね。面白そうやなぁと思って、さして頂いた。

こう、株があるんですよ、まとまって。大体ね、三から四苗(なえ)を。一苗っていうのは一粒から出来てるもんですよね。一つの籾(もみ)から芽が出て、これが一つの苗ですよ。それを三から四くらいで一株になるんですよね。一株っていうふうにして言っても、それは大体、三から四苗になります。

じゃ、一苗、つまり一粒ですよ、お米一粒。一粒で、じゃあそれを蒔(ま)いて、どれだけお米が、籾が出来るんか。何粒出来るんか、一粒から。

じゃあこれ、一年目でやったらね、五百粒ってありますね。よくやっても、まあ千粒っていうのもないわけじゃないらしいですけど。でもやっぱり一般的に言うたら、五百粒が一つの目安になる。

じゃあこれ、二年目。その五百粒をまた蒔いたとしましょう。一粒か

ら五百ですから、五百かける五百でどうなるか言うたら、二十五万粒になります。ま、この時点でもう二十五万、二年目になったらまあそれこそね、一粒万倍になるんでしょうね。ちなみにこれを三年目、二十五万粒を蒔いたら、一粒が五百粒を生み出すとしたら、一億二千五百になるんです。一億二千五百粒。

で、先ほど、一石っていうのが、六百五十万粒って言いましたからね。そうすると、一億二千五百粒っていうのは、十九石から二十石くらいになるんです。って考えたら教祖様がね、「一粒の種から積もれば何石というようになる」。うん、確かに三年やったら、一粒が十九から二十石くらいにはなるという。計算ではなりますよね。計算ではありますけど、何

石か出来るっていうことだと思います。上手に作りはる人がおったらね。

それぐらいに、確かに教祖様のご信心が一粒の種やったとしたら、そこから百何十年かけて、一体どれくらいの人が信心したんでしょうね。ちょっとそんな計算って、どこかしてはんのか分かりませんけど、まあでも、億じゃ足りんでしょうね。うーん。そら、ものすごい人達が信心しておかげを頂いたと思います。

でも元を辿(たど)れば、一人が良い手本を見せてくれはったんですよ。教祖様がね。川手文治郎(かわてぶんじろう)さんが、良い信心してくれた。そして私達は、百何十年経っても、それでもおかげを頂けるような信心を真似(まね)てね、教えも

遺して下さって。

でもまあ書かれた教えだけでは、なかなか自分自身の身の上のことについて、どのみ教えが合うんかっていうことだって分かりませんから、だから、それぞれのお広前（ひろまえ）、「万国まで残りなく金光大神（こんこうだいじん）でき、おかげ知らせいたしてやる」って遺して下さり、神様のね、思し召（おぼめ）しもあって、そして色んなお教会が全国にあるわけで。

尼崎教会も、津田和太（つだかずた）先生が開いて下さって、百二十四年目になるわけですが、これも和太先生が良い信心をして下さった、そこからまた繋がって、一体どれぐらいの人が尼崎教会にこの百二十四年間でご縁頂いたんか分からないですけど、ご縁頂いてもみんな信心しておかげ頂いた

かどうかもちょっと分かりませんけど、せやけどまあ、たくさんの方がそら、信心なさったと思いますよ。そういう意味じゃ、教祖様のように、あるいは初代のようにとまでは言わんでも、お互い今生きてるということは、自分の周りにも人もおりますしね。それが職場であれどこであれ、家族であれ、やっぱりこう、信心頂いておかげを頂くようになりましたらね、こう自分のとこでちょっと止めんと、四代金光様が、「良いものは人に伝えて、悪いのは自分のところで食い止めていく。それが信心である」というふうに仰ってましたけど、やっぱり良いものの最（さい）たるものがご信心やなぁと思います。

信心させてもろうたら、やっぱりおかげ頂けます。本当に一生懸命信心したら、時間はかかっても、皆おかげは頂けます。そら、ここにいらっしゃる方、お互いに皆それを実感してるから、信心も続いていらっしゃると思うんですけどね。まあそういう意味じゃ、良いものをせっかく伝えて頂きましたんで、自分とこで食い止めようとせずに、ま、家族だけとは言わんでもいいと思います。ご縁のある方、信心を伝えたい方、で、信心を求めて来られる方。難儀（なんぎ）な人はたくさんいらっしゃいますからね。「世間になんぼうも難儀な氏子あり」ですから。そん中で、一人でも二人でも、信心する人が増えてったらええなぁ。そのように思わせてもらいます。

今日は今日で、信心のお稽古（けいこ）、励まして頂いて、神様から頂くおかげをね、しっかりと、今日一日分を頂ける、そういう信心をさしてもらいたいなぁと思います。よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話　第四話

令和三年一月四日　朝の教話

発行日　令和三年八月十三日

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五

落丁本・乱丁本はお取り替え致します。